

## 4

包頭の四海通信局の早馬は物凄い速さで駆け続け、ついに落日の時分に祁県の商店街に到着した。件の塩車の御者が喬家の大徳興絲茶荘の前で手綱をひきしぼり馬から降りようとすると馬が突然どうと倒れた。音を聞きつけた店員が二人出てきて御者を助け入れた。それからややあつて大徳興の曹大番頭が血相を変えて茶荘を飛び出すと、馬に飛び乗り喬家堡めざして走った。

喬家の屋敷に到着した曹番頭は馬から転がり降りると、ドンドンと門を叩いて大声で叫

んだ。

「門を開ける！ だれもないのか、早く門を開ける！」

すぐに長順が、驚きのあまり血の気をなくした顔で、何か尋ねようとしたが、曹番頭の土気色の顔に気づいて急いで邸の中に請じ入れた。

母屋の広間では曹氏が素早く手紙に目を通し、すつと血の気を失うとグラリと身体が傾いた。慌てて駆け寄る杏児を押ししのけ、じつと目を据えている。涙があふれ出し喉が震えたが、声が出ない。四十の坂を越えた曹番頭も、さすがにこのありさまには取り乱した。

「奥様、奥様、こんなときに倒れてはなりませんよ！」

杏児が曹氏の背中を叩いたりさすったりすると、ようやく曹氏は口がきけるようになった。

「曹番頭さん、大旦那様はずつと包頭の報せを待っていらしたのです……でも、でもこれが顧大番頭さんがわれわれ喬家に寄越した〃よい〃報せなのでしょいか？」

「わたしも以前大旦那様にご忠告申し上げたのです。顧番頭の話は聞くな、有り金を全部はたいて高梁を買い占め達盛昌と勝負に出るなど無謀だと。ところが大旦那様は聞き入れてはくさいませんでした。いまとなっては……」

曹氏は泣いた。

「あんな覇権争いのせいで、喬家の財産は無駄に食いつぶされてしまったのです！ 顧番頭は銀子があれば復字号を救えると言っていますが、一体どこにそんな大金があると言うのです？」

「大奥様、いまは焦っている時ではありません。一刻も早くどうすべきか大旦那様にお伺いを立てるべきです。大旦那様が祁県から包頭に持ち込んだ銀子を全て高梁に換え倉庫に積み上げ

た途端、達盛昌が包頭の商家を焚き付けて復字号に精算を迫らせたのです。決まり上、三ヶ月以内にこの多額の借金が返済できないと、復字号は破産するしかありません！」

曹氏は茫然自失となり滂沱の涙で頬を濡らした。

「大旦那様はご病気があんな様子なのに、どうして報告などできるでしょう？ それじゃ死ぬと言うようなものじゃありませんか？」

曹番頭は心を落ち着けて穏やかに言った。

「大奥様、こんなことは申し上げたくないのですが、こうなった以上遠慮してもおられません。とにかく緊急に銀子が必要なのです！ 喬家はほんとうにわずかの銀子も工面できないのですか？」

曹氏は目眩がして倒れそうになり、杏児が必死で胸を揉んでくれたおかげで、ようやく心地ついた。

「番頭さん、このところずっと我が家の暮らし向きがどうだったか、よく知ってるでしょう？ 以前あなたに質入れしてもらった玉石の屏風、あの一両を除いては、この家には一両の銀子もないのです。高梁を買い付けるために太原、北京、天津の支店の銀子もみな使い切ってしまったのです。大旦那様とわたしはこの上どこから銀子を持ってくればいいのです？」

「なんとということだ、ほんとうに銀子がないとなれば、包頭復字号の十一の店舗は破産です。そうなったら祁県の三力所の店も、太原、天津、北京の店もきつと保ちますまい！ その情報はきつと祁県に伝わりませう。うちと大きな取り引きのある水家、元家、それから大小の商家がそれぞれ一斉に大徳興に借金の返済を迫りに来たら、喬家の店はみな人手に渡ってしまう

……」

「曹番頭さん、ここで待っていてください。わたしは大旦那様にお会いしてきます！ 今度こそ喬家の上に天が落ちてきたのですわ！」

曹番頭は不安に思ったが、実際ほかの手だてもなくなためらいがちに何度も尋ねた。

「大奥様、大旦那様のご病状がこんなでは持ちこたえられましようか？」

「だれがあの人をこの家の当主にしたのですか？ 商売をこんなことにしてしまったのはあの人です。あの人を一日騙すことはできても二日騙すことはできません。遅かれ早かれ全てを知ることになるのです！ それがあの人運命であり喬家の運命なのです。人は運命から逃れることはできません！」

曹番頭は、手紙を手にフラフラと奥へ入っていく曹氏をなすすべもなく見送った。

ほどなくして紙のような顔色をした杏児が飛び出してきて泣きわめいた。

「曹番頭さん、早く来てください。包頭の報せを聞いて旦那様が血を吐かれたんです！ もういけません、番頭さんに会いたがっておられます！」

曹番頭はよろりとよろめくと、危うく倒れかけた身体をかろうじて卓を掴んで支え、急いで中に駆け込んだ。

奥では致広が大量に喀血していた。曹氏がしっかりと抱きしめて声もなく泣いている。曹番頭は致広の姿に胸が張り裂けそうになった。

「大旦那様……」

曹氏は手を振って使用人たちを下がらせると、悲痛な声で言った。